

製品市場を追跡する

金属探傷剤



☆市場の沿革

いわゆるアベノミクスを背景に国内製造業の復調に期待が高まっているが、昨年は自動車・鉄鋼・プラント向けとも期待したほど伸びていないというのが金属探傷剤各メーカーの見方である。為替、原油、米国経済を含め景気の先行きはますます不透明だが、非破壊検査への要求は高まっており、各社とも高性能品・高付加価値品の開発に主力し需要喚起に取り組んでいる模様である。

エアゾール金属探傷剤の草分けの商品は、1957（昭和32）年のマークテック「スーパーチェック」、日本油脂（現タセト）「カランチェック」と目される。ほとんど、太陽物産、栄進化学が登場、電子磁気工業なども姿を見せ市場が形成

76—80年は造船不況から300万缶に後退するも、81年からは再び上昇基調となり、89年以降の円高内需拡大政策も追い風に91年の生産量は460万缶にまで達した。しかし92年以降はポストバブル不況、一部銘柄の完成品輸入が重なったことにより

缶「エアゾール協会統計（以下同）、輸入100万缶を含めて440万缶に回復。その後も一退で推移。近年の国内生産量をまとめると、05年306万缶、06年271万缶、07年276万缶、08年357万缶となっている（この間、輸入量は120—140万缶）。09年の

☆市場の課題

移している。昨年は大枠で前年と変わらないながらも、一部の輸入銘柄が国産にシフトしたことで国産350万缶強、輸入50万缶前後と予測される。

その後、09年1月3月期を底に自動車・鉄鋼産業は徐々に回復、低下していた金属探傷剤の生産量も回復を見せた。しかし、11年3月の東日本大震災の発生に

エアゾール、金属探傷剂市場は、自動車や鉄鋼、電力などの業界市況を反映している。92年以降は、長期不況による自動車の国内生産減、製造拠点の海外移転から生産量が減少。逆に2004年以降は一般景気の改善、復調の気運は高まって

☆各社の現況

に金属探傷剤の今後の復調

マークテックは、染色浸透探傷剤「スーパーチェック」シリーズを主力に、人や環境への安全性を追求し、天然原料・化粧品原料を主成分として使用した「エコチェック」や、蛍光浸透探傷剤「スーパーグロウ」、蛍光磁粉探傷剤「スーパーマグナレー10ゾル」など幅広いラインナップで展開している。

装置の大型更新などがあ
り、売上高はほぼ前年並み
を維持、収益は前年以上を
記録した。今年はさらに収
益力を上げる計画であり、
付加価値の高い製品を市場
に投入していきたいと考え
ている。そのようななかエ
アゾール金属探傷剤の販売
状況は、一部原価が動きた
した恩恵もあったものの全
体的にみれば前年比は高い

マークテック追う
トタセ、栄進
安定推移の400万缶市場

製造業向け
復調期待
高性能品開発に各社注力

ドネシアで鉄鋼向けの大型案件があったこと、国内で浸透探傷装置の大型案件を納入したほか、マレーシアに設置の大型更新などがあり、売上高はほぼ前年並みを維持、収益は前年以上を記録した。今年さらには収益力を上げる計画であり、付加価値の高い製品を市場に投入していきたいと考えている。そのようななかエスゾール金属探傷剤の販売状況は、一部原発が動き出した恩恵もあったものの全体的にみれば前年比横ばいであった。当社は昨年2月、アルコニックス株式会社との間で資本業務提携（100%子会社化）を行った。アルコニックスは、非鉄金属分野に強みを持つ東証一部上場の商社で、国内のみならず海外にも多様なネットワークを構築している。この

「昨年の当社の金属探傷剤販売実績は、製造ラインで使うリッター缶など非工安ゾールが伸びているなか、エスゾールタイプは前年並みであった。昨年は、GHS対応を終了、表示の国際対応とともに、原材料の配合を変えるなど、環境・安全により配慮する改良を行った。年々増えていく化学物質への規制に今後も対応し、付加価値品の開発を含めブランド力を強化していきたい、お客様第一に、お客様の要望にこたえる開発を続けていきたい」（理事・津村氏）。

昨年の生産量は20万缶前後と観測される。

栄進化学は、染色浸透探傷剤「レッドマーク」を主力に、蛍光浸透探傷剤「ネオグロウ」、磁粉探傷剤「マグナトロン」など多彩に展

※各銘柄にそれぞれ洗浄液、現像液、浸透液がある。それぞれがさらに細分化しており価格は、定ではないが平均すると1セット(浸透液1缶、現像液2缶、洗浄液3缶)で7000~9000円、低ハロゲン・低硫黄製品や不燃性製品はその約3倍から5倍の価格となっている。

▼E1工検査計測(1K Sチエック) 420ミリ、AWゾル▼イチネンケミカルズ(ミクロチエック) 420ミリ、ダイゾー、(レンカラー)、輸入品▼栄進化学(レッドマーク)(ネオクロール)(レッドマークスペシヤル)(ネオクロールスペシヤル)(マクナトロン) 各420ミリ、日本近所、AWゾル▼M1工

生産量は、前年のリーマンショックに端を発した世界同時不況により製造業が不振、その影響もあり、国産230万缶、輸入120万缶の合計350万缶と大きく後退した。10年は巻き返し、460万缶(国産361万缶、輸入100万缶)に。11年は、東日本大震災の影響を比較的軽微に抑え450万缶(国産349万缶、輸入100万缶)。12年は430万缶(国産326万缶、輸入100万缶)。13年は420万缶(国産314万缶、輸入100万缶)。14年は440万缶(国産338万缶、輸入100万缶)。15年の生産量は国産341万缶、輸入50万缶強と推

善に伴い、自動車や鉄鋼生産の増大、各産業の整備投資拡大が大きく寄与した。アルミやスチロール、素材の採用進展で、磁粉探傷需要も上昇。さらにコンブライアンス意識の高まりも検査需要を底上げしている。08年秋の米国リーマンショックにより世界的な景気後退が起こり、日本経済も例外なく厳しい状況下におかれ、自動車・鉄鋼産業の生産は急激に落ち込んだ。その

いる。昨年は自動車産業、鉄鋼産業、プラントとも思ったほど良くなかったものの、金属探傷剤の需要は安定、また田安基調が続いたことから輸入から国産に切り替えた銘柄も見られた。しかし中国の人文費高騰や、不安定な為替動向、原油価格の上昇などに加え、米国経済の動向など、先行きはますます不透明になっていることが指摘されているが、日本の製造業ならび

「昨年の非破壊検査市場を見ると、全体的に良くなっているように感じている。まずここ数年大きな動きがなかった鉄鋼産業が一昨年くらいから少しずつ動きたし、それにもなつて検査需要も前年を上回った。また航空機産業向けはこの5年間くらい堅調に推移する一方で、自動車向けは増えませず減りもしない安定した状況である。昨年

ネットワークの活用を含め、シナジー効果を高める活動を進めている。また当社は一昨年5月からタイ工場でエアゾール充填を開始。タイや中国などの現地ニーズに即したローカライズした製品の開発に注力している。昨年10月にはインドネシアに駐在員事務所を開設。アセアン地区の展開をさらに拡大させることも北米・中南米への展開も拡げていきたい」（常務執

検査向けである。昨年の実績はほぼ前年並み、発電所向けなど定検向け需要は前年と状況が変わっていない。一方、一時期伸びていた中国向けにビジネスをしている企業への需要は落ち着いてきているように思われる。近年、安全・安心の意識は高まっており、検査への興味・需要は増えてきていると見ている。今まで検査をしてこなかった業界・お客様にたいしてどのような

（傷剂）420ミリリットル、自家充填
鈴木油脂工業（スプレー探傷剂）420ミリリットル、朝日エテア
ダイソフニチモリ事業部
（キスチエック）480ミリリットル、
東邦金屬▼太陽物産（レツドチエック）420ミリリットル、日本瓦斯（マグナゾル）420ミリリットル、東洋エテア▼タセト（カラーチエック）（ケイコーチエック）（ジキチエック）
各420ミリリットル、AWソル▼電子磁気工業（スプレー蛍光磁粉FYT-7000型）

本紙推定による（以下同）昨年の生産量は、150万缶前後のうち海外生産量50万缶前後」と観測される。

タセトは、染色浸透漂白剤「カラーチェック」、蛍光浸透漂白剤「ケイコーチェック」、磁粉漂白剤「ジキチエック」を展開している。

さらに、新しい需要を取り込めるような高性能・高付加価値品の開発も今後の課題となるだろう」（参事・相村氏）。

昨年の生産量は90万缶前後と観測される。

このほかイチネンケミカルズ「ミクロチェック」など多数の銘柄が続き市場を

イトチエツク) 各420ミリ
AWゾル▼トラスコ中山
(αタシシヨウスプー)
420ミリ▲ AWゾル▼日本ウ
エルデینگ・ロッド(ウ
エル・チエック) 600℃、A
Wゾル、輸入品▼マークテ
ック(スーパーチエック)
450ミリ▲ 600ミリ▲、(エコチ
エック) 450ミリ▲ 600ミリ▲、
スプー▼アコル▼50ミリ▲

(文責・生亀)

（スーパーマグナリー10
ゾル） 450^{ミリリットル}、AWゾル、
輸入品▼横浜油脂工業（R
TEC 504） 420^{ミリリットル}、（同505
）各300^{ミリリットル}、東邦金
属。